

本願寺史料研究所報

5 0 号

発行所 本願寺史料研究所

〒六〇〇一八二六八

京都市下京区七条大宮上ル

龍谷大学大宮図書館内

電話 〇七五―三四三―三三一―

内線 (五四一八)

発行者 所長 赤松徹眞

発行日 二〇一五年一月二〇日

追想 三夜荘

掬月誓成

はじめに

今年『宗報』三月号に、本願寺別荘伏見三夜荘の除却が発表された。それにもない本願寺史料研究所の調査が五月十一日と決定し、筆者も同行が許され、久々に三夜荘を訪れた。三夜荘については龍谷ミュージアム『二葉荘と大谷探検隊』図録(平成二十六年十月刊)に詳細な記述がなされており、ここではそれに触れつつ、新たに知り得た史実を述べたい。

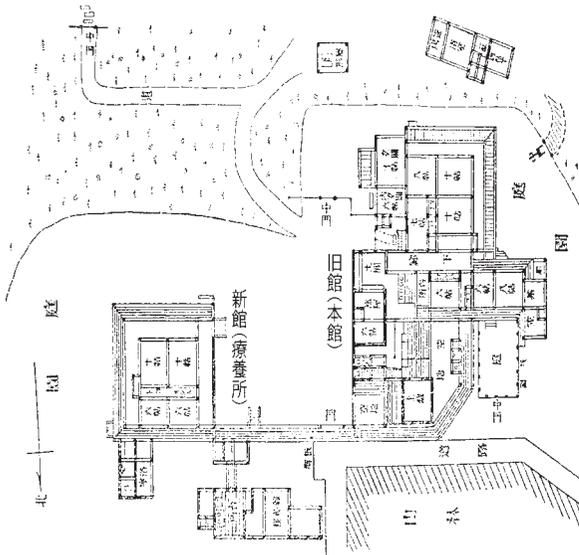
一 明如光尊の時代

明如(一八五〇〜一九〇三)は、激動の幕末・明治を生きた。常に時代に対応すべく教団を率い奮闘した。具体的には、幕末・明治初頭にかけて、数度に亘る朝廷への献金や架橋(御幸橋)などにより、天皇朝廷から篤い信頼を受け、父広如や義父徳如を助け、勤皇を實行した。また、禁門の変で類焼した学林を再興し、教育制度を刷新し、そして集会(宗議会)を開き、教団の近代化に心血を注いだ。さらには明治政府の神道国教化政策に、つまりは国策としての廃仏毀釈に昂然と対峙し抵抗し、大教院離脱をはたし、「信教の自由」を勝ちとった。

宗門改革における本願寺宗務所の東京移転問題に関しては、本願寺重鎮らの反対にあい実現出来なかったが、後日、反対派のリーダーの一人赤松連城は、「彼の時か

の改革が実現せられしならば、宗門の発展は一層大なりしならんに、不敏短見にして猥りに阻止せしことは罪死に当たると懺悔せし」(上原芳太郎編『六華遺音』)と語った。

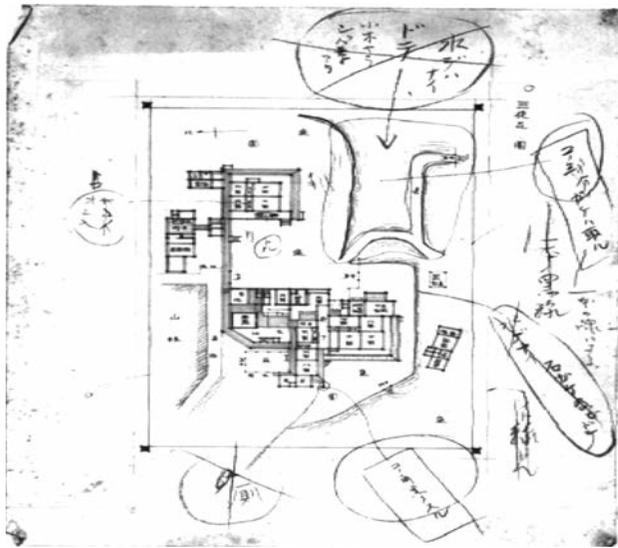
木戸孝允は、明治元勲中唯一といいいいほど、本願寺に義理を尽くしたため、葬儀には明如が自ら導師を勤めた。三夜荘は、「天の月 宇治川の月 盃の月」を三夜とし、木戸が名付けたと伝わる。伏見桃山丘陵の南西端に位置し、宇治川を左右に見渡せて、観月橋を右眼下にする景勝地にある。本館(旧館)と呼ばれた最初の建物は明治九年(一八七六)、新館(明如療養所)は明治三十四年(一九〇一)にそれぞれ竣工され、昭和五年



「三夜荘図」(昭和2年『明如上人伝』所収を一部補記)

(一九三〇)光瑞時代に増築された新たな書齋なども存在した。

当初は、明如の私的なサロンであり、療養所でもあった。三夜荘を訪れた公人は誠に多彩だ。栄昭皇太后(孝明天皇皇后)、昭憲皇后(明治天皇皇后)、伊藤博文(初代内閣総理大臣)、三条実美(内大臣)、西園寺公望(ベルギーおよびドイツ公使、後に内閣総理大臣)、スウェン・ヘーデン(スウェーデンの探検隊長)等々。これはあくまでも推測の域を出ないが、三夜荘は明如が様々な人びとに会い、宗門の将来の展望・戦略をプライベートな形で思索した場所であったのではないかと考えられ



『明如上人伝』所収「三夜荘図」の校正
(校正の筆跡は、上原芳太郎か。本願寺蔵)

る。

明如の三十三回忌に出版された前出の『六華遺音』に、「(明如は) 徳川慶喜公の晩年には親交して、或る年三夜荘に招待して、半日歓晤に消された」とある。「或る年」とは、慶喜が公爵を授けられた後、上洛した明治三十五年(一九〇二)八月二十一日のことで、実はこの五日前に大谷光瑞が隊員を率いて、ロンドン・ビクトリア駅から仏蹟巡拝(第一次大谷探検隊)に出発している。

「歓晤云々」とは、歓待してお互いにうちとけたという意味だ。さらに上原は、幕末の元治元年(一八六四)禁門の変直後、京都守護職の会津藩が本願寺を大搜索した際、つまりは長州敗残兵の搜索だが、慶喜が命じてこれを止めさせたというエピソードも紹介している。

明如は歌人としても著名だが、三夜荘滞在中にも多くを詠んでいる。

明如

まれ人に 見せんとおもひし 足曳の

山はかひなく 雨になりぬる

(明治十七年)

この「まれ人」とは、正客主賓の意味で、植松有経(御歌所歌人)と尾崎穴夫(歌人)のことだ。最も来荘した人々と言える。

医師で御歌所寄人の須川信行の『三夜荘歌会記』を

『榎餘余芳』(護持会財団編、明如二十五回忌刊)は記している。明治二十三年(一八九〇)正月三十日、明如四十才のことだ。参会者は、明如・枝子(明如室)・山内芳秋・尾崎穴夫・須川信行で、兼題は『名所梅』、計二十一首。

明如

ふしみ山 梅のさかりに なりしより

わかかくれ家 人もとひけり

枝子

梅溪の うめのさかりは ふしみ山

たた白妙に みえわたるかな

同書の「歌会三夜荘の記」の載る皇后女官の税所敦子、歌人の鶴久子などの歌人を失って、次のように詠む。

明如

こそことし ことばの友を 川水の

かえらぬ旅に たゝせつる哉

(明治三十四年)

宮中御歌所の高崎正風・大口鯛二・阪正臣などもよく来荘し、歌会や宴会が催された。高崎正風は御歌所初代所長で、天皇や皇族に和歌を詠進した。明如とは親交が深く、明如は歌の師と仰いだ。後に明如遷化のとき、名

号六字を題に弔歌を詠んでいる。六首の冒頭の一首を掲げる。

正風

南みたより 外の手向は なかりけり

たたありし世の おもひ出られて

また彼は、明如七回忌に出版された『六華集』に序を、跋には大口鯛二(周魚)が寄稿している。なお話が前後するが、大口は明治二十年代毎夏に来荘し、明治二十九年(一八九六)八月、明如の依頼により本願寺蔵を調査し、後奈良天皇下賜の『三十六人家集』、いわゆる「石山切」を発見したことで知られる。

明如のありし日を偲んで、次女武子(後の九条)は、

三夜荘 父がいました 春の頃は

花もわが身も 幸多かりし

(父の法会に)

と残している(『金鈴』)。

二 鏡如光瑞の時代

光瑞(一八七六〜一九四八)は、大正三年(一九一四)の宗主辞任後、活動の拠点を中国大陸や東南アジア

に移すが、帰国時は神戸二楽荘を失ったため、多くを三夜荘にて過ごした。とくに昭和に入るとファンクラブの様な「光寿会」「光瑞会」が発足し、『鏡如上人年譜』によれば、「光寿会」は大乗仏教の深理について光瑞の指導を仰ぐことを目的とし、「光瑞会」は処世について光瑞の指導を眼目とする)、両会の園遊会などが三夜荘にて催された。また連枝(宗主の親族)や他宗派の管長、総長を招いて時局の話や園遊会、観桜会などにも使用された。

さて、本願寺別府別院内にある光瑞の遺品を陳列する大谷記念館は、一冊の写真アルバムを所蔵する。これは戦前・戦中のある時期、光瑞の秘書を務め、また光瑞門



三夜荘新館 (原板は長野真宗寺蔵)



三夜荘旧館（原板は長野真宗寺蔵）

下生のつどいである瑞門会のメンバーでもあった故末広正昭の寄贈によるものだ。その中に昭和六年（一九三一）正月元日撮影（年代については昭和三年、同八年と諸説ある）の三夜荘内部が二枚ある。

旧館（本館）の書院で、光瑞関係の書籍等で散見することができる。最近では前出の『二楽荘と大谷探検隊』図録でも同様の写真が掲載されている。元旦であるから床飾りがあり、床の間は桂離宮松琴亭などで見られる市松模様で面白い。また現代人の感覚・常識では些か趣味が宜しくないと思われるが、虎成獣の毛皮が二枚敷かれている。二楽荘本館の印度室や英国室に同様の写真が見られるが、同一の虎皮だろうか。そのようなことも

実に気になる。

何より印象的なのは、床の間の落し掛けに「押しピン」とめられている」（和田秀寿氏談）紙にサンスクリット語が書かれている。入澤崇氏に直訳してもらおうと「大王たる獅子に相応しいものは おそれに震える事のない勇猛なる明晰なる知力である」。同氏によればこの文は、仏説無量寿経の文で、仏国土に生まれた求道者たちについて、ブツダがアーナンダに対して比喻を交えて説く場面の一節とのことである。

誰が何の目的でこの様な文を書いて落し掛けなどに貼り付けたか。答えは二枚目の写真にあった。それは床の間の前に大谷学生（中学生）と思しき人物が二人、同じ形の上着でやや緊張ぎみに直立している。恐らくお付きの者であろう。その二人の前面に広いテーブルがあり、本や万年筆などの文具が置かれている。写真のキャプションに「三夜荘の御書齋」とある。この時期、旧館書院は光瑞の書齋となっていた。サンスクリット語は、正に自身を鼓舞する言葉でもあり、さらにはその全生涯を貫く自身の姿そのものといっても過言ではない。

この文を頭上後方に掲げ、読書や著述する光瑞を想像するとき、心よりの憧憬を覚える。

三 三夜荘の現状

前述したが八、九年ぶりに三夜荘を訪ねた。新館と光



三夜荘新館玄関 (本願寺提供)

瑞時代の本玄関、その他の半ば廃墟になった建物に入った。電気が通っていないので内部は暗い。しかも土足でゴソゴソと歩き回った。三夜荘の歴史を思えば、何とも無礼な事であるが、これも除却されて無くなってしまいう事を思えば、感慨無量である。敷地約三千坪というが、南西側、つまり宇治川が見渡せる崖の方だが、絶壁ではなくいくつかの段状になっているので、多少なりとも広く感じられた。コンクリート製の小さな防空壕などもあった。前回よりは何より真竹・孟宗竹が伸びやかに雑然と生え、宇治川は見えない。梅や桜などは影をひそめ、

本当に痛々しい状態だ。

その桜といえは、明如は梅を好み、自ら榊と号した。光瑞は桜を好み、先代佐野藤右衛門と共に日本中に存在するすぐれた品種の桜を苗にして、大陸に一〇〇万本移植する夢などを実現しようとした。三夜荘にも様々な桜が植えられたが、今はなき「紅虎の尾」は先代藤右衛門が発見し、光瑞命名の「市原虎ノ尾」の変種だそうである。いまでも貴重な一つだそうである(当代藤右衛門談)。

三夜荘はまた、光瑞大谷学生募集の拠点ともなった。『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』(昭和五十三年刊)には、三夜荘にて試験や面接が行われたことがわかる。また一時、学生の共同生活の場となっていた事が諸々に散見される。その中に「本願寺の明星」と題し、仁本正恵が「上人は平生伏見の三夜荘におられたが、大東亜戦の頃から、神戸北野町に寓居を定め」とあるが、その神戸北野町の別邸が如何なる様子であったのか、史料もなく今では知るよしもない。

日本は、日中戦争とやがて太平洋戦争へと突入していく。二宗主の私的サロンとしての三夜荘は、時代と共に徐々にその役割を失っていったのかもしれない。

(きくづき せいじょう 本願寺別府別院大谷記念館副館長)

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

本願寺の「胞衣納」について

— 広如・徳如の子どもから —

長瀬由美

はじめに

出産は現在でも死に至る場合があるが、医学が今ほど発達していない時代には死と隣り合う人生の危機であった。そのため出産に際してさまざまな儀礼・習俗が生まれ、出産には穢れが発生していたことは周知のことである。穢れにつながる出産を、本願寺がどのように対処していたのかを知る端緒として、拙稿「本願寺における産所について―広如・徳如期より―」（『本願寺史料研究所報』第四六号。以下、拙稿と略記）で産場所について考察をした。出産時には、産場所として産屋・産所を設け、日常生活とは違う場所でおこなうのが常であったからである。本願寺においては産所を「穢之間」として設置し、出産後、忌みが明け始める御七夜に「穢之間」を取り払うことで対応していた。「穢之間」である産所をどこに設けるかは出産する女性の立場、すなわち妻か妻でないかにより違いがあった。妻の立場にある女性はその居館でおこない、妻以外の女性ではその時の妻の状

況によって、建物が用意される時とされない時とに分かれた。

では、出産後に母体から排出される胎盤をどのようにあつかっていたのであろうか。胎盤は「胞衣」と呼ばれ、胞衣の取り扱いが子どもの禍福に関わると考えられたことから、胞衣の取り扱いにもさまざまな習俗・作法が生まれた。拙稿で取り上げた史料や日次記などに「胞衣納」との記述があり、本願寺においても「胞衣納」がおこなわれていたのである。本稿では本願寺における胞衣納について、第二十代広如とその法嗣徳如の子どもから検討する。なお、検討する人々の呼称は、本稿作成に使用する史料に記載のまま用いた。

「胞衣納」に関わる人と胞衣納の日取り

本願寺において胞衣納は胞衣納役を任命しておこなっている。広如と益君の間に誕生した祚君を例にあげる。祚君は天保二年（一八三一）六月朔日に誕生するが、益君の妊娠は正月十五日に治定し、正月二十日に坊官下間少進以下十人が御慶事掛に任命されている。出産が近くなった五月四日に、御慶事掛のなかから胞衣納役が任命され、胞衣納をおこなっている。

一 御誕生被為在候節

御産髪垂被仰付之

富嶋頼母

一右同断

大西隼人

御胞衣納之役被仰付之

一右同断

前田左近右衛門

〔晨章殿御記録〕天保二年五月四日条

一辰ノ刻 御胞衣納

隼人

左近右衛門

〔御日記〕天保二年六月七日条

祚君の胞衣納は胞衣納役二人でおこなっているが、他の子どもでは胞衣納役のほかに、胞衣納下役・付添・見分・見計役の役名の者、奥勤めの女性の名前があり、胞衣納は複数人の立ちあいでおこなっている。

祚君の胞衣納は六月七日で、これは祚君の御七夜にあたる日である。広如の子どもの胞衣納日を以下にまとめる。

誕生

胞衣納日

祚君	天保二年六月朔日	六月七日辰刻
怜姫	天保三年十月三日	
邦君	天保三年十二月十八日	十二月二十四日巳刻
需君	天保八年六月二十五日	七月三日巳刻前
鶴君	天保十一年七月三日	七月九日巳刻
峯君	嘉永三年二月四日	二月十日辰刻
簡君	嘉永五年閏二月十九日	閏二月二十五日辰刻

お姫 文久三年九月十五日 九月二十一日酉刻

胞衣納日の記事がみえない怜姫を除いて、広如の子どもの胞衣納は子どもの御七夜にあたる日におこなっている。御七夜は忌みが明けていく節目として祝がおこなわれるが、本願寺では御七夜の祝を本来の御七夜の日とは違う別の日におこなうことがある。峯君では、「若君様、今日御七夜二付、御祝等御彼岸中ゆへ、御二七夜迄御延引」と、彼岸中を理由に御七夜の祝を延引している。簡君も、「精日二付」と二十五日の御七夜の祝を翌二十一日としている。峯君・簡君ともに、御七夜の祝を本願寺の事情により延引しているが、胞衣納は延引することなく御七夜にあたる日におこなっている。怜姫では胞衣納の記事はないが、「御七夜昨日之所御法事ゆへ今日二御のひあそはし候」と御七夜の祝を延引したことを記している。広如の子どもだけでなく、徳如の子どもの胞衣納も健磨を除いて、御七夜の祝を延引しても胞衣納は御七夜にあたる日におこなっている。これらから、怜姫の御七夜の祝を「御法事」を理由に延引しても、胞衣納は延引することなく御七夜にあたる日におこなった可能性が高い。広如・徳如の子どもの胞衣納から、御七夜にあたる日に胞衣納をおこなうことにしていたが、それは絶対ではなかったようである。徳如の子どもの健磨の御七夜の祝は、「御追夜」を理由に日取りを変更するのであるが、延引するのではなく、徳如の結婚が迫っているため

に前倒しをして御七夜にあたる日の前日に祝をおこない、胞衣納も御七夜の祝と同じ日の朝におこなっている。以上のことから、本願寺の宗主・法嗣の子どもの胞衣納は、御七夜に当たる日におこなうことを原則とする。御七夜におこなう祝は本願寺の事情により延引することがあるが、胞衣納は延引することなく御七夜にあたる日におこなうこととしていた。しかし、御七夜にあたる日も絶対としていたのではなく、御七夜の祝までに胞衣納をおこなうこととしていたようである。

御七夜には、誕生した子どもの父母へ祝儀物が献上され、父母からも医師や産婆、そのほか出産に関わった人々へ下付物を与えている。祚君の御七夜では、益君から「御胞衣納二付」として、胞衣納役の二人に金子が下付され、他の子どもたちにおいても、胞衣納役の者へ金子が下付されている。怜姫では胞衣納役の者への金子下付に加えて、「一錢七百文、御胞衣納メ地所土掘申付候二付」と、胞衣を納める場所の穴を掘った源次郎へも下付金が与えられている。

胞衣桶について

胞衣は土器や桶に入れて処理をおこなったが、本願寺ではどのような容器を使用していたのであろうか。本願寺において胞衣を納める容器は、出産のための準備品を記した帳面に「胞衣桶」と記しており、桶を使用し、出

産準備品の一つとして用意した。帳面の日付から品々は出産の二、三ヶ月前から準備をしている。出産準備品の記録は怜姫・邦君・峩君の三人にあり、まず怜姫では次のようにある。

一 御胞衣納桶

〔天保三年辰年七月怜姫御方御誕生御妾服調進物納メ帳〕

壹ツ

〔貼紙〕御品通り以下、鶴亀松竹白絵アリ一対

胞衣桶の等級は下の物で、鶴亀松竹の白絵が描かれている。材質・大きさなどについては不明である。次に邦君をみてみる。

御胞衣桶

鶴亀松竹之白絵あり

壹対

〔朱筆〕右先達而之御胞衣桶余り結構過候間、木柄余り御念不入、御懸流し之心得二而、御作法通り調進之事

御押桶

右同断

壹対

〔朱筆〕右別而粗末二而宜候間、心得違無之様御□□候事

〔天保三年壬辰年十月御産所御入用御品書〕

邦君の胞衣桶も、怜姫と同様に鶴亀松竹の白絵が描かれており、桶そのものの等級については先の胞衣納に使

用した桶が「結構過」だったので、今回の品は「念不入」、「御懸流し」とある。「御懸流し」には使い捨ての意味があることから、高級な品を求めていない。桶の単位を対としているのは、本体と蓋との部分からなっているからである。邦君の記事では、「御胞衣桶」に続いて、「御押桶」と記されているが、『明治天皇紀』によると、押桶は新生児の部屋の床の間に二つで一対として置いた。押桶にも胞衣桶と同様に白絵が描かれ、一つには米一包・花結の糸二条、もう一つには青石三個・方頭魚二尾を入れた。新生児の穢れを祓い、長寿に通じる物として使用していた¹⁰⁾。

三人目の峩君では、次のように記されている。

御中通り以下

一 御胞衣桶

壹 対

鶴亀松竹梅白絵アリ、檜木地、当度壹ツ

差渡八寸三分、かわ高サ六寸八分、蓋かわ六分

但、外箱桐野呂蓋并細白練丸

外箱八寸八分四方、深サ五寸三分、蓋かわ式寸三分

御台とも九寸三分四方、足高サ三寸五分、十文字足

一 御押桶 当度御用意二不及 壹 対

(嘉永二酉年十一月御慶事御用調進物申附帳)

峩君では、描かれている絵、桶の等級に加えて、使用している木と桶の大きさを記している。外箱・台も用意

していた。峩君の胞衣桶の格は「御中通り以下」で、怜姫・邦君の胞衣桶を格の高い品としないことに共通しており、本願寺では胞衣桶に高級な品を使用することはなかったであろう。

三人の胞衣桶には鶴亀松竹の白絵が共通して描かれている。嘉永五年(一八五二)に誕生した祐宮(明治天皇)に使用した胞衣桶にも「白木を以て製し、胡粉を以て松竹鶴亀を画く、これを白絵と称す、梅花は其の散るを忌みて画かず」と、本願寺で使用していた胞衣桶と同じ彩色を施した絵が描かれている。さらに、仙台藩藩主伊達家の墓所跡から胞衣桶とそれを納める青銅容器が出土したが、その桶は杉材で、側板外側には親子と思われる三羽の鶴と二匹の亀、松と竹が白色の顔料で描かれている。これらから天皇家・大名家と同じ仕様の胞衣桶を本願寺は用いていたのであろう。しかし、元禄十六年(一七〇三)に出た香月牛山『小児必要養育草』に、胞衣納の方法として、胞衣を水で洗い、白く彩色し鶴亀松竹の絵を描いた杉桶に入れて、吉方の方角を選んで人の踏まない場所の土中深くに納めるとの記述がある。鶴亀松竹を描いた胞衣桶に胞衣を入れることは、天皇家・大名家やそれに準じる階級だけに限られるものではなかったのかもしれない¹⁵⁾。

峩君では誕生時に用意された品々の納入者及びその価格の記録をまとめて袋に入れている。胞衣桶を納入したのは木具屋甚兵衛である。木具屋は胞衣桶の他に御産着

台、竹刀など木製の品を納めている。胞衣桶については次のようにある。

一四拾三匁 御胞衣桶 壹

同下台とも

桐野良蓋外箱 壹

白ねりひも共

〔嘉永貳酉十二月御慶事御用之通〕

出産準備品の記録がある三人の胞衣桶は、格や描かれている絵についての記述はあるが、価格が判明しているのは、広如の子どもでは峩君の胞衣桶一点のみである。¹⁷⁾

胞衣納の場所について

胞衣桶は出産準備品として用意され、御七夜にあたる日に胞衣納をおこなうことを原則とし、担当者の役名・氏名も判明したが、胞衣を納めた場所を示す記録は現時点では不明である。

胞衣納の場所に関係する史料として、益君が祚君を出産する際の史料群中に、生家である鷹司家から胞衣納について書いている書状が一通ある。¹⁸⁾ 日付は五月七日で、宛名は下間少進、差出人は牧治部少輔である。この書状は益君が祚君を妊娠・出産した時の文書類を入れた旨の上書きがある袋に入っており、このことから日付の五月七日は天保二年と考えられる。

〔端裏
下間少進様〕

牧治部少輔

御手紙致拜見候、薄暑之節候処、弥御安全被成御勤珍重奉存候、然者過日御問合御座候胞衣納方御取扱之儀御問合之趣致承知候、右ハ先日も粗申入候通、此御方御取扱之儀者、兼日陰陽師へ日時・方角等勸出等被仰付、方角之社地御霊、或ハ吉田等、何方ニ而も吉方之地へ侍分之者致持参、社家へ応対之上、可然場所へ胞衣ヲ埋メ、上ニ竹ヲ四方ニ立、注連ヲ引、其儘帰り候事ニ御座候、尤聊社家へ挨拶遣候事ニ御座候、左様御承知可被下候、且又御見合ニハ不相成義ニ御座候得とも、女御様近頃御降誕之節、御胞衣被納候御様子問合、別紙之通ニ候、甚御嚴重之御事ニ候間、他所之例ニ不相成義ニ候、貴様迄鳥渡掛御目候、上へ御差出し等ハ無之様致度候、御一覽之上、御返し可被下候、以上

五月七日

差出人の牧治部少輔は鷹司家の家司である。祚君の母である益君は、天保元年（一八三〇）五月七日に鷹司家から嫁いでいる。祚君は翌年六月朔日に誕生しているの
で、益君の初産が間近になり、胞衣納についての問い合わせを本願寺から益君の生家鷹司家におこない、それへの返答書である。この書状には胞衣納の日時と場所・納め方についてのみ記されており、本願寺からの問い合わ

せには胞衣を入れる容器を含んでいなかったのかもしれない。この書状以外にも本願寺が鷹司家へ御七夜・忌明について問い合わせをおこなっていることを示す鷹司家からの書状がある。本願寺がこのような問い合わせをおこなったのは、益君が鷹司家から嫁ぎ、そして出産を迎えたことによるのであろう。というのは、本願寺の宗主が格の高い家の娘を妻に迎えるのは、寛永二年（一六二五）に第十三代良如が九条家の娘（九条忠栄の娘通、貞梁院如高）と結婚したのが最初で、その後、鷹司家・二条家や宮家から妻を迎えている。しかし、出産となると、寛文七年（一六六七）に第十四代寂如が鷹司信房の娘幸（將軍徳川家光の妻の妹、貞淑院如瑞）を迎え、二人の娘を出産してからは絶えている。家格の高い家から迎えた妻が出産するのは百六十年ぶりのことであったために、生家へ出産儀礼に関する問い合わせをおこなうことになったのではないだろうか。鷹司家の胞衣納について知ることができる書状ではあるが、祚君をはじめ広如の子どもの胞衣納場所についての史料は他に無く、益君の子どもの胞衣納の場所を決定する際に、書状にある事柄をおこなったかは不明である。

広如の子どもの胞衣納の場所を知るとは、現存の史料からはできないが、徳如の子どもである枝君の胞衣納で、場所について手がかりとなる記事がある。枝君は安政五年（一八五八）九月二日に、父を徳如、母を幹君として誕生した。誕生に関する記録類中に「幹君様初而御

着帯御祝諸事留帳」と表紙に記されている史料があり、次の記事がある。

一九月三日、御胞衣納御場所見分二付、隼人・左馬太兩人百花園江罷越

枝君誕生の翌日に、胞衣納役（大西隼人・岡本左馬太）が胞衣納の場所として百花園を見分したことを記している。百花園は「法如の時百花園を開きたれば、内境内は路を躑えて北に拡がり、堀川支流を境として本國寺に對せり」と『棟牒余芳』にはある²⁰。これによると、第十七代法如の代（寛保元年（一七四一）から寛政元年（一七八九））に、境内の北側に開いたとするが、正確な年代は不明である。「百花園」の名称がいつ頃つけられたかも不明である。百花園内には明月楼・三笑亭などと名付けられた建物や池があり、その規模は東西約七十間（約一二五メートル）である²¹。

明治三十五年（一九〇二）に発行された『本派本願寺名所絵図』に、百花園は次のように記されている。

百花園 亭は境内の西北にありて後園といふ、莊中花卉多くを配植し庭には清泉を湛ひて翠緑深く、春は花、夏は納涼の夕景色、得もいはれず眺め好く、殊に秋の夜のさわやかなる月、冬の夜の凄寂たる月を眺むるに尤も適す

庭が作られた時期や名前の由来は不明であるが、百花園には多くの花が植えられ、四季おりおりに花が咲いていたようである。幹君が枝君を出産し、胞衣納の場所として見分を行っている安政五年には、正月に和歌の会を催すのはじめとして、三月の牡丹・藤、十月の菊と、花が見頃の時に広如は百花園を訪れ、また、客を招いて宴を開き、家臣にも見るように命じている。

胞衣納の場所として見分におもむいていることは、胞衣納の候補地ではあるが、実際に胞衣を納めたかになると、それは可能性に止まる。しかし、百花園を見分するからには、何らかの理由があるのであろう。胞衣納の場所として百花園を見分しているのは枝君の時で、枝君を出産した幹君は鷹司輔熙の娘で、益君と同じ鷹司家から嫁いでいる。百花園の見分は、鷹司家の胞衣納場所選定理由によるものなのであろうか。

胞衣納の場所についての手がかりは鷹司家からの書状（祚君）と百花園（枝君）の史料二点のみである。鷹司家では、胞衣納の日時と方角を陰陽師の勘出によって決めている。祐宮（明治天皇）の胞衣納の日時・場所も陰陽師の勘出で決定しており、江戸時代後期の皇室の胞衣納は、埋納場所と日時の勘文が進上されて決定している²²。公家もそれにならっているのであろう。本願寺の胞衣納の日時と場所のうち日時は判明しており、それは御七夜を基準とする日である。胞衣納を記している日次記類などの史料に陰陽師の語はみえず、陰陽師の勘出によるこ

となく日時を決定していたと思われる。日時同様に場所についても、陰陽師がかかわらずに決定し、胞衣納場所としての百花園の見分は、本願寺の選定方法によるものではないだろうか。

本願寺の胞衣納についてみてきたが、胞衣を入れる容器は当時の天皇家・大名家と同じ彩色の絵を施した桶を使用していた。これは本願寺の社会的立場からの選択であろう。しかし、その桶に高級な品は求めていない。拙稿で明らかにしたように、宗主・法嗣の子どもの出産は、出産する女性の立場により取り扱い方に違いがあった。しかし胞衣納では、使用する桶・胞衣を納める日に女性の立場による違いはなく、女性の立場の違いが胞衣の取り扱い方に及んではない。本願寺においては胞衣が子どもの成長に関わるなどの意味を持つことはなく、天皇家・公家がおこなう易占の要素を持つ陰陽師による場所・日時決定に倣うこともなく、胞衣を納めたのではないだろうか。

〈注〉

- (1) 「御日記」 嘉永三年二月十日条。
- (2) 「御日記」 嘉永五年閏二月二十六日条。
- (3) 「御日記」 天保三年十月十日条。
- (4) 河内顕証寺撰真の息、弘化四年（一八四七）に本願寺に入寺し法嗣となる。
- (5) 徳如の子どもの誕生、御七夜の祝、胞衣納は次の通りである。

誕生

御七夜の祝

胞衣納

悠磨 嘉永五年八月五日

八月十五日

八月十一日卯半刻

(十一日を彼岸中に付延引)

貞姫 嘉永七年七月十四日 七月二十日 七月二十日巳刻

歎うげ 安政二年九月二十九日 十月五日 十月五日巳刻

健けん 安政四年二月五日 二月十日 二月十日巳刻

(十一日を迺夜に付十日)

枝えだ 安政五年九月二日 九月晦日 九月八日巳刻

(九月八日を関東御中陰中に付延引)

(6) 徳如と幹君は、安政四年二月十七日に婚姻している。

(7) 「天保二辛卯年六月」天保二年六月七日条。

(8) 「天保三壬辰年九月御妾服恰ちや姫様御誕生御用調進物御払并被下物帳」。

(9) 宮内庁『明治天皇紀』第一(吉川弘文館、一九六八年)。

(10) 『明治天皇紀』によると、米は新生児の座を動かすのにあわせて散じ、修祓のかわりとした。花結の糸は、新生児がくしゃみをするたびに結んだ。くしゃみの回数は長寿に関係すると考えられていたことによる。青石と方頭魚(ホウボウ科の魚。金頭とも)は、新生児の健康を祝うものとして供する。

(11) 注(9)に同じ。

(12) 峩君の胞衣桶には、鶴亀松竹に加えて梅が描かれていた。峩君の胞衣桶については他にも史料があり、これにも梅とある。しかし、本稿で使用した「嘉永二酉年十一月御慶事御用調進物申附帳」の出産準備品納入者の記録には、「一御胞衣桶壱ツ、鶴亀松竹之白画有」と記し、梅は描かれてはいない。

(13) 松本健「瑞聖寺旧伊達家墓所出土「胞衣桶」の保存処理に伴う調査」(『港区文化財調査集録』第四集、一九九八年)。

紫雲山瑞聖寺(東京都港区白金台三一―一九)は、寛文十年(一六七〇)に創建され、第四代藩主伊達綱村(一六五九―一七一九)の時に墓所が置かれた。平成七年に改葬跡地から胞衣桶とそれを納める青銅容器が発見された。伊達家の家紋が描かれてい

ることなどから、伊達綱村の妻千姫が嫡男扇千代を出産したときに使用された胞衣桶の可能性が極めて高いとする。桶は一三枚の側板、底板からなり、蓋がある。桶の総高は二一・三センチ、最上部の口径二五・一センチ、底径二二センチである。蓋の直径は桶の最上部の内径と同じ。

(14) 香月牛山『小児必要養育草』(『子育ての書』一、東洋文庫二八五、平凡社、一九七六年)。

(15) 小沢詠美子「胞衣」をめぐる諸問題―江戸の事例を中心に―(『史潮』第三八号、一九九六年)。小沢は、三井家の例をあげて、豪商も胞衣桶を使用していたのではないかとするが、三井家の史料には胞衣桶の画については書かれていない。

(16) 袋の上書「嘉永二酉年十一月御慶事御用諸事書類入」。袋の法量は、縦三九・五センチ、横二九〇・〇センチ。

(17) 徳如と幹君の子枝君(安政五年九月二日誕生)には、胞衣桶代を示す史料が残っている。納入者は峩君と同じ木具屋で、「一八拾式匁五分、御胞衣桶壱ツ、同壱ツ乗下台壱ツ、同桐外覆壱ツ、桐野良ふた、白ねりノ丸ひも付」とある。(安政五歳午七月御産御用)。

(18) 法量は、縦一六・七センチ、横一四〇・二センチ。

(19) 「百花園」の文字は、「華」と「花」がともに使用されている。本稿では「花」を使用する。

(20) 真宗本願寺派護持会財団『棟牒余芳』(一九一七年)。

(21) 「百花園図」(本願寺史料研究所保管)。

(22) 注(9)に同じ。

(23) 宮内庁『皇室制度史料』(儀制誕生、三、二〇〇九年)。

(ながせ ゆみ 本願寺史料研究所研究助手)

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

《頁の余白に》「近世の本願寺、その日その日」(編集子) 十六頁にするのに、少し頁の余白があります。取り立てて特別な結論はありませんし、思いこみ、勘違い、調査不足、間違いも気にせず、気楽に書きます。

【滴翠園の魚】

現在の本願寺の宗務所に問い合わせたところ、百華園の池には誰が餌を与えているのか不明なのですが、大きな鯉が泳いでいるそうです。おそらく観賞用の錦鯉でしょう。しかし、もう一つの池である滴翠園の池には飼育されている魚はいないとのことでした。

しかし、かつては滴翠園の池にも魚が飼育されていました。この魚について記事を紹介しておきたいと思えます。留役所「諸日記」嘉永四年(一八五二)五月十八日条によれば、吟味役より次のような伺いが提出されます。

一吟味役方左之通伺出

一滴翠園御池魚疲衰甚見苦敷有之、毎々餌之御沙汰

御座候二付、篤与御番之者江申付置候得共、不相

替魚疲居候二付、亦々過日取極小頭を以申付候、

以来取極左二、大奥方御麦湯之末を相下ケ遣し来

り候へ共、聊之趣二而数十疋之魚江中々行届不申

候間、外々承り合申候処、夏向者塩鯖之損し色替

り候を相求メ、よくく焙り遣し候方宜、亦者雜

魚之頭を屋江頼置、夫を遣し候茂宜、折々ハ麦を

煮て遣し可申由、尤冬向者麦計之由承り申候間、

大御仲居江御出入致居候屋江申付、試二遣し申候而
者如何御座候哉、過日御尋二付、此段奉申上候

この記事には、魚種が記載されていません。夏場の餌が、食用にならなくなった塩鯖を焙ったものと雑魚の頭などの動物性の餌で、水温が下がった冬には植物性の餌として麦となると、やはり観賞用の錦鯉なのでしょうか。まさか食用魚ではないでしょう。

この伺いに対して、次のような下知がだされます。餌は買ひ上げとせず、経費はいささかもかけてはいけない。この夏は、献上されてきた鯖が傷んで、食用にできない状態ではないので、この鯖を餌に使い、これがなくなったならば三御殿の局より廃棄される糠を用い、決して支出とならないようにという内容でした。五月十八日条のすぐ後ろに十月十四日の下知が筆録されているのが不思議なのですが、次のように筆録されています(全文、朱筆です)。

聊之義二而も御買上二相成候而者、御費二相成候条

不宜候、尚亦今十月十四日民弥方申出候趣二而者、

只今当夏鯖献上之品相損有之、逆も食用二ハ難相成

二付、右を相用候、猶亦右も相尽候間、三御殿局遣

捨之糠を相用候而、御費二ハ決而不相成旨二候間、

其通取計有之而宜敷候間、御番之者江無等閑日々糠

取二相廻り候様、急度可被申付事

十月十四日及下知

五月の伺いからこの下知まで、五か月の時間を要しました。この間、疲弊した魚は死ななかつたのかと心配になります。下知が布達されたのは夏を過ぎた十月十四日でした。餌不足で「疲衰」していたのではなく、ひょっとして水中の酸素不足で、水面で口をパクパクしていたのではないかとこの疑いもあります。

それにしても献上された夏の鯖が十月まで保存されていたとするなら、かなり酷い状態になっていたであろうと想像します。現在でも釣り餌に使用される切り落とした鯖の頭に発生させたハエの幼虫である「さし虫」が夏の鯖に発生したとしても、十月の下知のときにはサナギから羽化してハエになってしまったことでしょう。

先に、献上された鳥はペットではなく食用であったろうと推測した根拠として、後の飼育の面倒さをあげておきました。本願寺の財政状況としては、天満の大根屋石田敬起を登用した天保の改革を経て幾分かは回復しつつあったとしても、少しでも無駄な支出を避けたかったのだでしょう。魚の餌代などは支出してもそれほど額にならなかつただろうと考えられるのですが、その経費も惜しむだけでなく、生き物としての魚の飼育そのものに困っている様子が窺えます。

しかし、滴翠園は公家・武家など諸家に対して拝観を許したりしています。園内の飛雲閣や憶昔亭は茶会・接

待の場でもありました。池の魚は招待者の目に触れる、そのような庭園の設えの一部であったとすると、弱つたままに放置することはできなかつたのだろうと想像しています。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

【編集後記】

まずは、編集子の無理な依頼に応じて、三夜荘について原稿を執筆していただいた掬月浄成氏に感謝します。五月十一日は編集子にとつて、初めての三夜荘訪問でした。十数年前より念願していた訪問でしたが、除却が公告されてしまった後であることと、その荒廃ぶりに無念さを感じてしまいました。

ところで、国の政治状況をみると、まさかこんな「愚劣」な政治状況に遭遇するとは思いませんでした。編集子は、池田勇人内閣の所得倍増期に小学生ですので、団塊の世代に少し遅れた三無主義の世代です。学生時代も、ノンポリ学生として過ごしました。そのような編集子でも、現在の政治の言葉の薄さに、さすがに言葉を失いそうになります。ひよつとすると、政治を主導する人たちは、人びとから言葉を奪うことを狙っているのではと勘ぐりたくなっています。

(歩弥紡)